

第6回 World Glaucoma Congress (WGC) 印象記

(2015年6月6日(土)～9日(火), 香港)

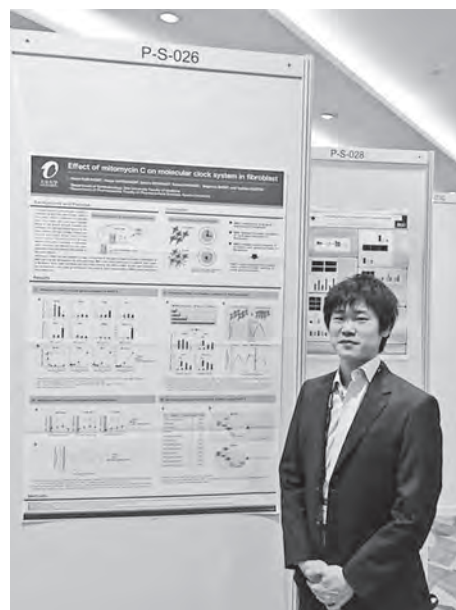
6th World Glaucoma Congressに参加して

大分大学医学部眼科学講座 楠瀬直喜

2015年6月6日～9日に香港で開催された、6th World Glaucoma Congressに参加した。香港は、ハワイとほぼ同緯度で、日中は30℃を超える暑さだった。会場はHong Kong Convention and Exhibition Centreで、地下鉄の駅から徒歩2分とアクセスのよい場所だった。

初日は、受付を済ませたのち、「Opening Ceremony & Presidents Symposium」にて講演を聞いた。体内時計に関する基礎研究を行なっている自分としては、眼圧の日内変動に焦点をあてた講演があっただけうれしかった。なかでも、『眼圧の日内変動を24時間連続でモニタリングするコンタクトレンズ』に関する講演に、興味もった。眼圧の日内変動、とくに夜間・睡眠中の眼圧を測定することは、緑内障の薬物治療にとって意義深いというのは理解できる。しかしながら、現在普及している機器を用いて夜間の眼圧を測定する場合、患者・測定者ともに睡眠を中断する必要がある。そのため、眼圧の24時間モニタリングが普及しないのもしかたないことである。緑内障治療のより一層の向上のために、眼圧を寝たままでも経時的に測定できるデバイスの開発が望まれる。

2日目には自分の発表があった。今回、私は『Effect of mitomycin C on molecular clock system in fibroblast』というタイトルでポスター発表を行ってきた。内容は、生体の概日リズムを制御する時計遺伝子の発現が、マイトマイシンCによって変化し、線維芽細胞における体内時計が変容するという基礎研究である。残念ながら、自分の研究に興味をもって見に来てくれた人は少なかった。2時間ポスターの前に立っていたが、話をしたのが5人と寂しい結果だったが、良い意見をもら



展示ポスターの前で

ることができた。マウスではどうなのか？ ヒトではどうなのか？ といった、個体レベルの結果が知りたいというコメントが多い印象だった。現在のところ、培養細胞を用いた実験しか行っていないが、今後はマウスなどを用いて、研究の質を高めていきたいと思う。

4日目には、「The road ahead to 24-h IOP monitoring」という眼圧の日内変動に焦点をあてたセッションがあった。昔から夜間に高値を示す眼圧の日内変動は有名だが、いまだに夜間の眼圧上昇を顕著に抑える薬物は存在しない。眼圧の日内変動のメカニズムを解明することができれば、夜間の眼圧上昇を抑制しうる新薬の開発に貢献できる。一貫して生体の概日リズムを研究してきた自分にとって、眼科、とくに緑内障は非常に興味深い領域であることを痛感した。

香港まで、大分市内から半日以上かかり、移動にかなりの労力を要したが、意義深い4日間を過ごすことができた。

2015 World Glaucoma Congress 印象記

山梨大学医学部眼科学教室 坂本 雅子

平成 27 年 6 月 6 日から、香港にて開催された世界緑内障学会へ参加してきました。初めての国際学会への参加であり、発表準備の段階から共同発表者である先生方に助けていただき、当日を無事に迎えることができました。

会場では当然のことながら、各国の参加者らがおもに英語でやり取りをしており、国際学会であることをあらためて実感しました。ポスター発表の時間になり、ポスターが掲示されているスペースに人が集ってさまざまな所で議論が行われていました。幸い、自分の発表したポスターにも興味をもってくださった方々がいたので、拙い英語でのやり取りをしました。

質疑応答に関して印象的だったことは、アジア圏ではない欧米の方々からの質問が多かったことです。発表内容が、日本における近年の緑内障治療の実態だったために、同じアジア圏の方々のほうが興味深い内容かと思いましたが、質問してくださったのはみな欧米圏の方々でした。臨床的な日本での緑内障治療傾向に対する質問ではなく、今回の発表のために利用したデータベース (Japan Medical Data Center : JMDC, 日本医療データセンター) についての質問が多く、国内での学会とはまた違った部分を学びました。日本では当たり前と感じていた保険制度も、日本特有の国民皆保険制度に基づくものであり、だからこそ今回のようなレセプトを元にしたデータベースで、国民全体の受診率、治療率が把握できるのだと感じました。また、日本における高齢者の増加。そして、高齢であっても積極的に治療を受けている実態を知り、驚かされている方々も多く、日本が他国に比べ長寿国であること、そして、それに伴う医療費の増大が不可避であることも再認識する機会となりました。質疑応答に備えて、質問されるであろう点をいくつか押さえてきたつもりでしたが、ある意味でその予想は裏切られ、国内外での違いを実感しました。

ポスター会場では、ほかの先生方の発表も見させてい

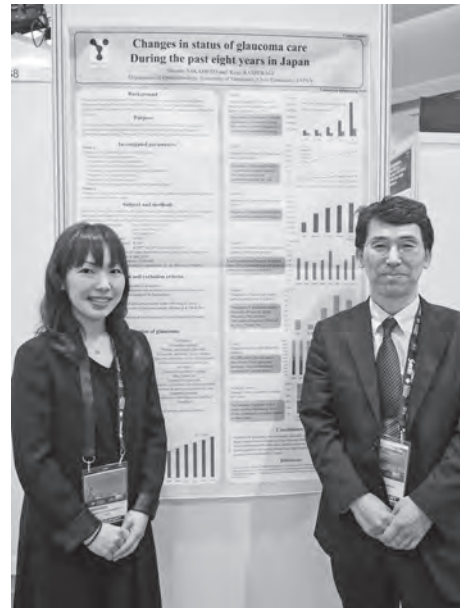


写真 展示ポスターの前で (左より、筆者、柏木賢治先生)

ただきましたが、本当に多種多様な発表内容で興味深いものでした。同じ日本からの発表に加え、人種的に近いであろうアジア圏からの発表を中心にみてきましたが、欧米圏などの他人種での違いを知るためにも、今後はもっと広い視野でみられるようにしたいと思います。

今後もこのような国際学会への参加の機会もあると思いますので、今回の経験を生かし、日々の臨床はもちろん、今後の学会参加への糧としたいと思います。共同発表者の先生方、このような奨学制度の機会を与えてくださった緑内障学会の先生方に厚くお礼申し上げます。ありがとうございました。

2015WGC 印象記

岐阜大学医学部医学科 高木 大介

今回、日本緑内障学会フェローシップグラント「2015 World Glaucoma Congress (WGC)」に採択いただき、6th WGC in Hong Kong に参加させていただきましたのでご報告させていただきます。

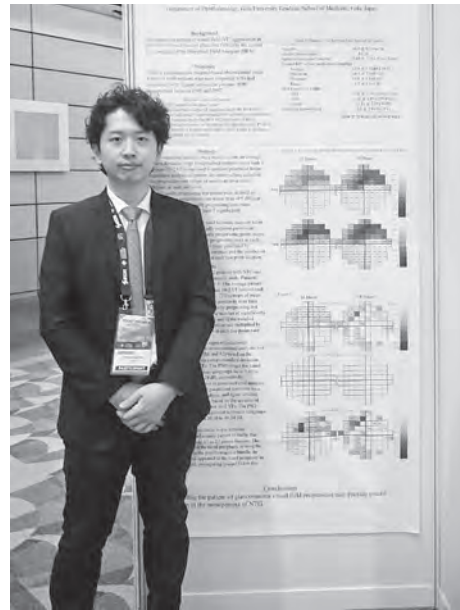
今回の WGC は香港で開催されました。香港は経度

114度で、日本との時差は1時間あります。岐阜からは、空港までは電車で1時間、中部国際空港から香港へは約4時間のフライトで到着しました。今回のWGCには、岐阜大学からは4人の若手が発表に参加させていただきましたが、日程の都合で僕は一人で香港に向かいました。空港からは、併設されているAirport Expressで香港島までは約1時間で到着しました。海外の学会に一人で行くのは初めてで、無事につけるか心配していましたが、香港は交通網が整備されており問題なく学会会場まで到着できました。ただ、ホテルや空港は英語が通じるため問題ないのですが、タクシードライバーは中国語しか話せない人が多く、あらかじめ中国語で住所を調べていく必要性を感じました。また、香港の緯度は22度で北回帰線上にあります。日本の最高気温が20度くらいであるのに対し、香港の気温は30度以上で湿度も高く、スーツを着て歩いていると汗が噴き出すくらいの暑さでした。

WGCは世界緑内障学会であり、日本の緑内障を専門とされているご高名な先生方はもとより、教科書で名前を拝見したことのあるような先生方も参加されており、大変刺激になりました。また、質疑応答の際には、自分の疑問に思ったことについて積極的に質問されている参加者の方々が多く、なかには質疑応答がヒートアップしている会場もあり、英語力の重要性も痛感させられました。

僕は3日目のポスター発表の予定でしたが、急な身内の不幸があり、会場で2日目の発表に変更させていただきました。急な変更に応じて下さった会場関係者の方々には、感謝の気持ちでいっぱいでした。そのおかげで発表も無事に終えることができました。前述の理由で、香港には実質一日しかいられませんでした。海外の発表一つみても国際色豊かにレイアウトされたものも多く、ポスターの数も多いので配色なども工夫していかに見てもらえるように工夫するかも重要だと感じました。

夕食は、山本教授が企画してくださり、普段は絶対に食べることができない3つ星のレストランでごちそうになりました。若かりし頃の話など、今では考えられない苦勞をされたことなど、普段、日常外来では聞くことができない貴重なお話を聞いてよかったです。



展示ポスターの前で

国際学会は発表準備はもちろん、旅行計画などの面で国内学会よりも大変ですが、得られるものもその分多く、今後も機会があれば参加させていただきたいと思いました。

今回、WGCに参加させていただき、世界の緑内障診療の考え方を勉強することができ、たいへん有意義な時間を過ごすことができました。

最後に、フェローグラントに採択して下さった審査員の先生方、ご指導して下さった先生方に深くお礼申しあげます。ありがとうございました。

第6回国際緑内障学会印象記

日本大学医学部附属板橋病院眼科 原 雄 将

2015年6月6日～9日まで香港で開催され、フェローシップグラントとして教室の山崎先生と一緒に参加した第6回国際緑内障学会は、私にとって初めての国際学会でした。空港のターミナルから出た途端に、まるでサウナのような湿気ですぐにシャツが汗で染まってしまうほどでした。会場の香港コンベンションセンターは、香

港島中心に位置するビジネス街で多国籍の金融機関のビルが立ち並んでいました。学会会場は1,000人規模の収容力を誇るコンベンションホールとその半分の規模のシアタールームが2カ所、10数カ所の50人規模の部屋が用意されていました。廊下にはいたるところにコーヒーコーナーがあり、軽食のサンドウィッチはベジタリアンやイスラムの方々にも配慮されていて、国際学会ならではの印象を受けました。

学会初日の午前中は「American Glaucoma Society」のシンポジウムに参加しました。本学会の形式として、各国の緑内障学会主催のシンポジウムが小会議室にて並列で行われていました。

興味深かったのは日本では未承認のゲル・ステントの発表で、映像では隅角鏡を見ながら、毛様体から結膜下へゲル状の柔らかいステントを挿入留置するというものでした。結膜下にマイトマイシンCを局所注射していたので驚きました。山崎先生曰く、アメリカでは、ベンチャー企業が新しいデバイスを次々と世に出しているそうで、さすが大国アメリカといった印象をもちました。

学会初日終了後、Conrad Hong Kong Hotelにて行われた「Santen Glaucoma Forum」に出席しました。内容は「緑内障早期診断」についてで、構造的変化と視野変化をテーマに各国を代表する先生方が講演しました。三木先生（大阪大学）が「視野検査では緑内障性視野変化が出ていない時点でのOCT上での変化」を解説され、Dr. Kim（ソウル大学）の「強度近視眼の緑内障患者でのOCTの評価方法」、朝岡先生（東京大学）の「視野検査からの緑内障早期診断」、Dr. Johnson（アイオワ大学）は「緑内障早期診断としてblue on yellowのHFA検査の有用性」などについて講演されており、今後はiPadなどのタブレット端末で視野検査ができるようになるそうです。日本からの演者や座長の先生は、まるで母国語かのごとく英語を流暢に操り、会場の最前列で積極的ではあるが少し的のはずれた質問をされていた某中東アジアの先生方をうまくたしなめていたやりとりが印象に残りました。

翌日からも香港の気温と湿度も手伝って観光にもほとんど行かず、学会会場でさまざまな国の先生方の発表を聴講しました。そこで感じたことは、母国語が英語では



展示ポスターの前で

ない国の先生方の発音はさまざまであり、必ずしも流暢である必要はない。むしろ、スライドの工夫であり、大事な箇所は文章をスライドに入れて解説を加えて、聞く人の立場を熟慮して作成することのほうが重要だと思いました。日本での学会では、なるべくシンプルに、かつ重要な点に絞ってと教わってきましたので、この点は国内と国際学会の相違点ではないかなと感じました。英語が上手なアジアの先生でも、早口でまくしたてるかのごとくしゃべり続ける発表は右から左でしたが、念入りにスライドを作成し、何回も発表のシュミレーションをしたことが伝わるそれは聞く側にはとても勉強になります。そのことを意識して実践されていたのが日本代表の先生方であったと思います。学会2日目午後の山本先生（岐阜大学）がChairをされた「Glaucoma with high myopia」というセッションにて、杉山先生（金沢大学）のご発表は、なにかのショーをみているように聴衆をひきつけるものでたいへん感動しました。講演発表は準備に準備を重ね、無難にこなしたとしても、質疑応答はこの私の能力では無理だと思いました。しかし、そのことがわかって課題がみえたのも大きな収穫であると感じています。

学会最終日は朝からポスターを貼りに行き、そのあと

はポスタールームではほかの先生方のポスターを拝見しました。ポスター内容の勉強はもちろんですが、構図、配置、フォント、カラーリング、素材など各国さまざまで、主催者側の規定をまったく気にしていないポスターもありました。今後の参考になるポスターに数多く触れて、たいへん勉強になりました。

初めての海外学会を通じて、日本の緑内障の先生方のレベルの高さ、そして、日本を代表して海外の先生たちと議論で渡り合う姿が威風堂々としていて格好よく眼に映り、同じ日本人として誇らしく思いました。

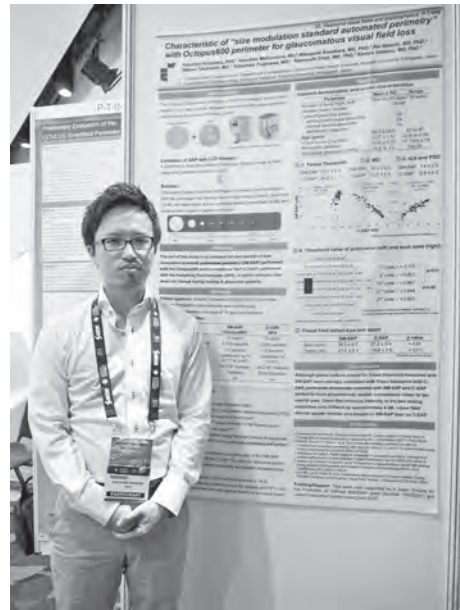
最後に、今回このような素晴らしい学会にフェロシップとして参加させていただきました日本緑内障学会の山本理事長、選考委員の先生、ならびに事務局の皆様へ深謝いたします。

6th World Glaucoma Congress に参加して

北里大学医療衛生学部 平澤 一法

2015年6月6日～9日までの4日間、香港で開催された6th World Glaucoma Congress (WGC) にてポスター発表を行いました。昨年9月に香港で開催された、2nd Asia Pacific Glaucoma Congress にも参加していたため、香港の気候などは把握していたものの、やはり身にこたえる暑さと湿気でした。学会場の香港国際会議場 (Hong Kong Convention and Exhibition Centre) は空港からも近く、電車、リムジンバス、タクシーのどれを使っても40分くらいで、とても交通の便が良いところだと感じました。

さて学会ですが、WGCには当大学から私を含めて3名が参加し、私は『Characteristic of “size modulation standard automated perimetry” with Octopus600 perimeter for glaucomatous visual field loss』というタイトルで、ポスター発表を行いました。WGCでは過去にも1度発表しており、2回目の発表でした。無事に自分のポスターの掲示を終えると、隣のポスターボードに、私が研究で使用しているOctopus600視野計を開発した、スペインのGonzalez de la Rosa先生が、ご自身



展示ポスターの前で

のポスターを掲示しておりました。いろいろとお話しを伺いたかったのですが、急いでいる様子でお話できなかったのがとても残念でした。

本学会のほとんどがシンポジウムや教育講演であり、一般講演は最終日の朝のセッションにいくつかあるのみで、それ以外はすべてポスター展示であったため、大きな会場で多くのポスターが展示されるのかと思いましたが、小さな会議室で1枚のポスターボードを、1日交替で4人の演者で共有する方式を採用していました。そのため、数多くの発表がありましたが、毎日、すべてのポスターを短時間で拝見することができました。

シンポジウムや教育講演を聞いて感じたことは、わが国の研究は“High Quality”であることです。本学会で講演を行った先生方のシンポジウムや教育講演の内容は、常に世界でも最先端を進んでおり、画像診断および解析技術は世界にも誇れるものだと感じました。また、私は視能訓練士であるため、手術手技などには精通していませんが、Surgical部門では、まだまだ検討課題などは残されていますが、角膜輪部から小切開で前房、線維柱帯へとアプローチし、結膜下にステントを留置する新しい手法が目玉されていました。朝一番のセミナーでしたが、会場には座席数の2倍以上の参加者が集まり、

各国の先生方が注目していると感じました。また、特殊なコンタクトレンズを装用し、眼球の膨張率の変化から24時間眼圧を計測する研究も世界的に始まっており、正常眼圧緑内障などの眼圧に関していろいろと解明されるのではと感じました。

最後になりますが、このたびは日本緑内障学会フェロースhipグラントのご援助を賜り、理事長の山本哲也先生、および選考委員の諸先生方に深くお礼申し上げます。ありがとうございました。

6th WGCに参加して

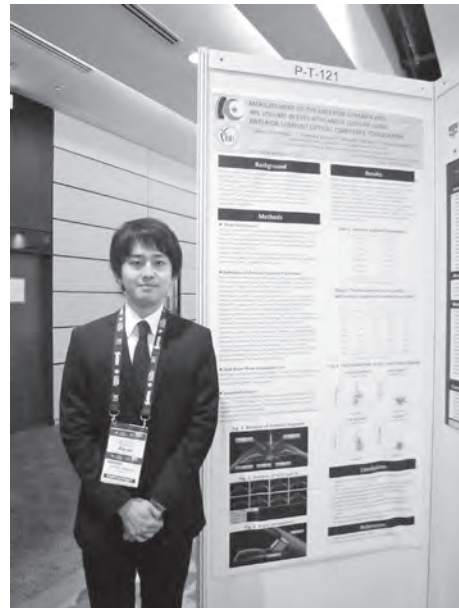
神戸市立医療センター中央市民病院眼科 吉水 聡

このたび日本緑内障学会フェロースhipグラントに採択いただき、平成27年6月6日～6月9日の4日間にかけて、香港において開催された6th World Glaucoma Congress (WGC)に参加して参りました。私にとっては初めての国際学会であり、日本や海外の緑内障専門のご高名な先生方のお話を聞くことができるとあって非常に楽しみにして参加致しました。

学会は、香港島北部のビクトリア湾に面した香港コンベンション&エキシビション・センターで行われました。香港はちょうど夏の初めで、熱帯特有の多湿と日差しのために、日中は立っているだけで汗が出る一方、夜は涼しい風が時折吹いて、比較的過ごしやすい印象でした。

今回、私は「閉塞隅角眼における前眼部OCTでの虹彩体積・前房体積の測定および他の前眼部パラメータとの関係」についてポスターで発表致しました。私の発表するポスターは、学会最終日の6月9日に掲示され、午後の45分間がポスター横での質疑応答の時間となりました。最終日ということもあるためか、前日までよりやや人数が少ない印象ではありましたが、いくつかの質問を受け、ディスカッションを行うことができました。

ポスター会場やBreak timeなどでは、他施設の緑内



展示ポスターの前で

障を専門とされている著名な先生方とお話をする機会を得ることができ、非常に刺激を受けることができました。

今回、学会に参加したなかで、緑内障の手術についてのシンポジウムや口演でMIGSが大きく取り上げられ、ディスカッションの対象となっていたことが印象に残りました。日本では未認可のデバイスについても多数取り上げられており、眼内からのアプローチによって線維柱帯だけではなく上脈絡膜腔や結膜下への流出路を作製するもの、毛様体破壊をするものなど多岐にわたっていました。ポスター会場でもMIGSに関する発表は多数みられ、発表者のなかには自身のPCを使用し手術での使用例をギャラリーに説明しているかたもいました。また、医療資源の限られた発展途上国での診療についてのセッションなど、国際学会ならではの話題も印象的でした。

最後になりましたが、今回、日本緑内障学会フェロースhipグラントによるサポートのもとWGCに参加し、貴重な経験を積むことができましたことに深く感謝し、心よりお礼申し上げます。今後も、これを励みに研鑽を積んでいきたいと思えます。